思想、これが根本だ。そしてこの唯一の根本によつて、プルードンが勸告したやうに、今日の社會の傾向を研究して、そこから革命の成功に必要な革命的狂熱と思想の大膽さを引き出して來ることが出來るのだ。

五

今、マルクシストや、ボシビリストや、ブランキストや、又ブルジユワの革命家等を一瞥して見ると——何故なら今日芽ぐんでゐる革命にはこれらの總てのものが顏を出すであらうから——そして同じやうな政黨が名は違つても同じ特徵を持つてどこの國にもあることを考へて見ると、そして又、その根本思想や目的や方法を解剖して見ると、驚くことには、彼等はみんな過去に目をつけてゐて、誰れ一人將來を見ようともしないで、そしてその政黨がみんな次ぎのやうな一つの思想しか持つてゐないのだ。即ち、その思想といふのは、政府の力としては甚だ強い、しかし世界を革命することの出來る唯一の思想を生みだすには甚だ無力な、ルイブランかブランキイか、或はロベスピエルかマラを復活させることなのだ。

みな獨裁を夢みてゐる。『無産階級の獨裁』とマルクスはいつた。詳しくいへば、その執政官共の獨裁だ。ほかの政黨の參謀等は、社會黨以外の我黨の獨裁だといふだらう。が、それはみな歸するところは同じだ。

みなその敵の合法的虐殺による革命を夢みてゐる。革命裁判、檢察官、ギロテイン、及びその雇人卽ち死刑執行人と獄吏とを夢みてゐる。

みな國民をその臣下として、國家の叙任を受けた幾千幾萬の官吏によつてその臣下を支配しようとする、全知全能の國家の政權獲得を夢みてゐる。ルイ十四世もロベスピエルも、又ナポレオンもガンベタも、要するにかういつた政府以外のものを夢みてはゐなかつたのだ。

みなこの獨裁時代の後に革命から生れ出る『建物の冠』として、代議政治を夢みてゐる。

みな獨裁者の造つた法律に對する絕對的服從を敎へてゐる。

みなその權力の首領等と違つたことを考へてゐるものは總て虐殺するといふ、公安委員會の夢ばかり見てゐるのだ。自分自身の意志するまゝに思索し行爲することを敢てする革命家等は殺されなければならない。もつと遠くへ行かうといふものは、猶さら殺されなければならない。もしマラがまだ許されるとすれば、マラ以上の共産主義者や　また『氣違ひ』だと呼ばれ

てゐるものは殺されなければならない。

みな何等かの形式の下に、或は私有か或は國有かの所有權の維持を欲してゐる。財産を使用し濫用する權利の維持を欲してゐる。仕事による報酬、國家によつて組織された慈善を欲してゐる。

みな個人や民衆の發意心を殺すことを夢みてゐる。考へるといふことは、と彼等はいふ、それは科學であり技術であつて、民衆には不向のものである。そしてやがて、民衆に發言することが許されても、それは彼等のために考へ彼等のために法律をつくる首領を選ぶために過ぎないだらう。そして思想の指導者によつて論ぜられない解決を、自ら求め、自ら試みるためではないだらう。マルクスやブランキイは、ルソオが十九世紀のために十分考へたやうに、今日の世紀のために十分考へた。そして、首領が先見しなかつたことは存在の理由がないことになるのだ。

これが革命家といふ名を僭稱してゐる百人中九十九人の夢なのだ。

六

さればもし諸君が、いはゆる革命的だといふ、しかし無政府主義的宣傳には染つてゐない、教育を受けた勞働者の集會へ行つて、そして革命の時にはどうするかと聞いてみるなら、富豪の家へ坐りこむとか、食料を分配するとか、銀行や倉庫に鋤や鐵鎚を打ちこむとか、監獄をぶち毀すとか答へるものがどれだけゐることだらう。そして一言でいへば、勞働者が搾取者にその勞力を賣つて、その金で又ほかの搾取者の家主や食料品屋や銀行屋などに支拂ふ、といふやうなことのもうない新生活を始める企てをするといふものがどれだけあることだらう。いはゆる革命家の中に、先づその首領等にそれを謀るといふことをせずに、みづからその思想を發表することの出來るものが、どれだけゐることだらう。みんなが異口同音に答へることはたつた一つだけである。それは『革命の敵』を虐殺するといふことだ。そして、それを最も多く虐殺すると約束するものは、それが革命をやるごく小さな手段について語るのに赤ん坊のやうに臆病であつても、直ちに本當の革命家だと見做される。

きのふは機關銃の餌食となり、あすは機關銃の主人となる。民衆はそれ以上に出てはいけないのだ。そのほかのことはいと高いところで考へてくれるのだ。

私はほかのところで既にこのことを云つた。民衆が長い間そのために壓迫されて來たものど

もに復讐する場合には、何人にもそれを非難する權利はない。ただ民衆の苦しんだ一切のことを彼れ自身も苦しんだものだけが、さうした場合にその中へ立ち入る權利がある。その子供等が餓えに泣くのを聞き、餓え疲れて死ぬのを見たものだけが、橋の下に寢ね、貧窮のあらゆる危惧とあらゆる屈辱とを受けたものだけが、紳士共がホテルで寢てゐる間に、家もなくパンもなくして大道にぶらつき、又は將軍共のやすやすと退却する間に雪の中に餓え凍えてうろついたものだけが、立ち入る權利があるのだ。民衆の復讐を審いて、きのふは穢多非人であつた彼が、その壓制者のためにそこへ立ち入る權利があるのだ。それにそれだけではない。民衆は幾千年以來、この復讐を教へられてゐるんぢやないか。この復讐といふことは、宗教によつて神聖にされ祝福され、そしてまた加害者のからだを傷つけることによつてその加害者が亂した正義を恢復する法律といふ女神の手で强ひられてゐるんぢやないか。誰も彼も合法の殺人によつて復讐を賛同してゐるんぢやないか。

又、今日の制度の下に、死刑執行人や裁判官に反抗する勇氣のあり、そして事實の上で反抗した人だけが、それについて論ずる十分な權利があるのだ。それをすることの出來なかつたものは默つてゐるほかはない。その復讐は彼等が授けた結果なのだ。合法的復讐といふ彼等が教

へた主義の結果なのだ。彼等が人命を輕んじた結果なのだ。この復讐の語るところのものは、キリスト教やローマ教の幾千年間の教育、貧窮の幾千年、一切の歴史なのだ。一切の歴史に對する叛逆だけがこの復讐に反對して立つ權利があるのだ。

しかし、この復讐といふ性質を否認して、國家の原則として立つて、そして革命の原則のやうな顔をして威張つてゐる暴力は、これとは全くわけが違ふ。それはジャコビン黨（中央集權派の典型）お得意の暴力だ。なぜなら、彼等は、民衆の狂熱がその最初の犧牲とともに消えて直ぐそれが後悔に變つてしまふことを知つてゐるからだ。そして彼等はまたその革命的思想の空虛を補ふために、革命の具體化としての合法的暴力を行はなければならないのだ。

彼等は、革命に反對することに利益を持つ人間共のごく少部分でも殺すことの出來ないことを知つてゐるブルジュワが、國民の大多數であることを知つてゐる。少數ブルジュワによつて支配されてゐる無產者の大衆しか、もうその想像の中に殘らないほど、資本の集中といふことを信ずる馬鹿者共にはお氣の毒であるが、これは事實なのだ。現に、フランスに今、ブルジュワと賃銀勞働者とがどの位ゐるか。一切の賃銀勞働者をかぞへて、それには官吏だの、從僕だの、大商店や大銀行の香水の香のぷん〳〵する雇人だの、鐵道の金ボタンをつけた雇人だの、

その他最も惡いブルジュワよりももつとブルジュワである一切の賃銀勞働者を入れて、一八八一年の國勢調査では、フランスの三千七百萬の全人口の中に、一切で七百萬しかゐなかつた。それにその家族を加へても二千萬足らずにしかならない。そしてそしてその殘りの一千七百萬は農民と地主とブルジュワとその家族とだ。そこから、地主といふよりも寧ろ無產者である農民の五百萬を引くと、他人の勞働で食つてゐる千二百萬のブルジュワ――その從僕どもは入れずに――が殘る。フランスは千二百萬のブルジュワだ。そしてイギリスには千五百萬のブルジュワだ。

今日のジャコビンもやはりブルジュワの虐殺のことは敢ていひ得ない。『その一切のものを默らして了ふには』と彼等は云ふ。『數千の頭を切るだけで十分だ。その恐怖でみんな地の下にもぐつてしまふ。』

さて、この理屈は或る一事を證據だてることになる。それは、フランス革命の時にジャコビン黨のブルジュワがいひふらしたこのお伽噺のために、民衆は彼れ自身の歷史から何んにも學ばずにゐるといふことだ。

先づジャコビン黨の革命が、もつと遠くへ卽ち民衆の押して行くところへ行くことを敢てしなかつた間違ひから、既に死につゝある時に、いはゆる恐怖時代が始まつたのだ。そしてハイカラ共や遊野郎共が隊を作つて民衆を侮辱し、赤い拍車の生活に戻つて、既にフランスの四分の三を支配してゐた反革命を叫ぶやうになつたのも、正にこの恐怖時代の下のことだ。

エドガー・キネエはそれをか、説明した。それは民主政治が恐怖政治を使ひこなすことが出來ないからだ。カトリックの教會や封建諸王がそれをやつたのと同じ結果を以て、それを使ひこなさうとするには、民主政治はルイ十一世や暴王ジャンやロシアの諸皇帝について學ばなければ駄目だ。民主政治はそれを大騒ぎしてやる。が、民衆は槍の先きに突き刺さつた頭のまはりでカルマニヨル（共和黨の歌舞）を踊つてゐる時にでも、實に頑是ない好い兒である。

封建諸王やロシアの皇帝はそんな騒ぎをしない。彼等はただ一人を打ち倒して他の者共をそれと同じ運命に陷る恐れで戰慄させる。彼等はその犧牲者を街の中に引きずり廻すやうなことをしない。牢屋の中で締め殺してしまふ。ロシアのアレキサンダー三世は、王位に卽くと直ぐ五人――しかもその一人は女――の犧牲者を選んで、それを締め殺した。それでも彼はまだそれを公共の場所の廣場でやつたことを後悔した。そんなことをしたので、ヴエレスチヤギンは

それを書布の上に不朽のものにしたのだ。その後はすべてシュルツセンブルグの牢獄に鎖づけにして、十年間もその囚人等の一語をも聞えなくし、生きてゐるのか死んでゐるのかも分らないやうにして置いた。彼は、廣場だの眞晝間の死よりも、どうしたのか分らない恐怖の方がもつと人心に強く響くといふことを知つてゐたのだ。

そしてキネエが猶、この恐怖政治はとても民衆には使ひきれないといつたのは實にその通りだ。恐怖政治といふやうなことは民衆は嫌ひなのだ。民衆は却つてそれを恐れてゐるのだ。民衆自身は直ぐそれにいやになる。パリ・コムユンの檢事や、犧牲者等の滿載された車や、斷頭臺などは、直ぐ民衆におぞ氣を立たせる。そして民衆は又、直ぐ、この恐怖政治が獨裁を準備することを知り、そしてその斷頭臺をぶち毀しに行く。民衆は恐怖政治によつて統治はしない。恐怖政治は鎖を鑄るために發明されたもので、殊にそれで合法の皮をかぶつた時には、民衆を結へるための鎖を鑄るものである。

七

敵に打ち勝つためには、斷頭臺よりももつと以上のもの、恐怖政治よりももつと以上のもの

が要る。革命的思想が要る。本當に革命的な、廣大な、敵が今までそれによつて支配して來たあらゆる道具を麻痺させて無能のものにしてしまふほどの、思想が要る。

もし、敵に打ち勝つためには恐怖政治しかないといふことであつたら、革命の將來はどんなに悲しいことであらう。が、幸ひに、革命には、それと違つた有力な他の方法があるのだ。そしてこの方法は既に、どんな方法が彼等に勝利を確かめるかといふことを求めてゐる革命家等の新しい世代の中に芽ざしてゐるのだ。彼等は、それがためには何によりも先づ、舊制度の代表者からその壓制の武器を奪ひ取らねばならないことを知つてゐる。あらゆる都市、あらゆる農村に於て、あらゆる壓制の主要機關をたちどころに廢止しなければならぬことを知つてゐる。殊には又、かくして解放された都會や農村に、住宅や生産機關や運輸の方法や、また食料その他生活に必要な一切のものの交換を社會化して、社會生活の新しい型を始めなければならないことを知つてゐる。

昭和二十一年四月十五日印刷
昭和二十一年月四二十日發行

革命の研究

一圓八十錢（送料二十錢）

翻譯者　大杉榮
發行者　秋山清
東京都中野區上高田二ノ三四八
印刷者　中田末男
東京都麴町區霞ヶ關三ノ三
發行所　コスモス書店
東京都中野區上高田二ノ三四八
會員番號A二一〇〇三三
配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

ダイヤモンド印刷株式會社